# 小林秀雄『Xへの手紙』

## ―語ることと信じること―

永藤　武

# 小林秀雄『Xへの手紙』

## ―語ることと信じること―

永藤　武

### 一

『Xへの手紙』は昭和七年『中央公論』九月号に発表された。小林秀雄が『様々なる意匠』で『改造』の懸賞論文第二席となり評論家として文壇的にデビューしたのが昭和四年であるから、それから約三年後の作である。これより先昭和六年二月に小林は、『批評家失格』との暗示的な表題を掲げたアファリズム風の文章を発表している。『Xへの手紙』の冒頭に「以前書いた自分の言葉」として配された「この世の真実を陥穽を構へて捕へようとする習慣が身についてこの方、この世はいづれしみつたれた歌しか歌はなかつた筈だつたが、その歌はいつも俺には見知らぬ甘い欲情を持つたものの様に聞えた。で、俺は後悔するのがいつも人より遅かつた。」はその『批評家失格』の末尾の一節である。もっとも一字一句忠実なひきうつしというわけではなく、原文の「壊血症の歌」が「しみつたれた歌」に、「美しい、見知らぬ欲情」が「見知らぬ甘い欲情」に、「私」が「俺」に、また読点が大幅に省略される等の異同がある。しかしそれらは『Xへの手紙』の文体にうまくとけこませるための改訂とみてよく、後者が前者の引用文であるとの基本的性格は疑う余地がない。

『様々なる意匠』で本格的な評論活動に入った小林が、ほどなくして『批評家失格』を書き、その結びの一節の引照をもって『Xへの手紙』を書き起こしていることは、この一篇の性格を考える有効な手がかりの一つになるであろう。

『Xへの手紙』において、書き手の「俺」は「いつとは知らず文学に関する批評文を製造して口を糊するまわり合わせとなつてゐる」者とされる。やゝ消極的な意味合いを含んではいるものの、文芸評論家（批評家）を自認しているのであって、ひとまずそれを受入れたところからこの一篇はしたためられている。しかもそれは、一度は批評家失格を宣言せずにはいられなかった後における容認なのである。批評家失格宣言の真意についてはしばらくおくとして、『Xへの手紙』はこれを、小林が己れの評論活動の根源にまでさかのぼって、その行為の意味と自分にとっての必然性とを探究し闡明しようとした一文とみることができよう。

あるいはいっそ、ものを書くことの意味ないしものを書かずにはいられない自分という人間存在の根拠の探索、と言うべきかもしれない。ただしその後の小林の活動を一貫しているのが、対象こそ文学作品および文学者に限らないながらも、その言語表現形態においていわゆる小説でも詩でも戯曲でもないという意味で、やはり評論と呼ばれるべきものであったことは言うまでもない。従って『Xへの手紙』一篇は、広い意味での真の評論家小林秀雄が、本文に「人並に三十になつて」云々とある正にその通りに三十歳にして、評論家たる自己存在そのものを正面に据えて、これと格闘し言語表出しようとした貴重な作品とみられる。そしてそれが、表題に明示されているごとく、〈私信〉といった体裁を採らねばならなかったところに、評論という言語活動の本質にまつわる重要な問題が提示されているのを覚えるのである。

ここでの発信人たる「俺」の言葉が、そのまま作者の声を響かせているものであることは間違いあるまい。「俺」

の心理状態の描写が切迫して来て「眼を閉ぢると雪の様なものが降つて来る、色もなく音もなく」といったやゝ常套的な象徴性に流れようとすると、すかさず「だが俺は止めにしよう、どうもつくり話を書くのは得手ぢやない。それにこれでも文学的描写の果敢無さぐらゐは俺も或る程度までは心得てゐる積りなのだ。」との抑制がかかる。いかにも文学的手法と見なされがちな安易な虚構は極力排除されているのであって、代りに強調されるのが「俺の努めるのは、ありのまゝな自分を告白するといふ一事である。」との命題である。

もとよりそれは文学そのものを否定しているわけのものではない。「俺」が峻拒するのは「小説を書かうと思つて書かれた小説や、詩を書かうと思つて書かれた詩」である。これらを退けたところから、真の文学とは何かが問題になって来るはずであり、その問題を正面に見据えようとする「俺」の立脚点は、そのままに作者小林の己れの言語表出行為の原点を見定めようとする意欲に他ならない。

では、その宛先人たる「X」とは誰なのか。むろんそれが誰それと特定できないから「X」であるに違いない。が、不特定多数の誰でもいいのかというと、決してそうではない。初め「X」は、文中で無前提に「君」と呼ばれるのみである。「君」の人物像にかかわるような記述は全くなされないのであり、ここでの「君」は、私信という一文の形式を整えるために便宜上設定されたに過ぎない、実体のない文字通りの架空な「X」であるかの感が強い。ところが終末近くなると、その「X」がにわかに具体的な人物像を喚起して、正に「君」と呼びかけるに相応しい色合をおびてくるのである。

すなわち、「『虚栄のうちで書くといふ虚栄が一番苦痛に溢れてゐる』『苦痛であることは弁解にはならぬ』『弁解ではない事実なのだ』『事実なら猶更許すことが出来ない』」との問答が回顧される。また「君くらゐ他人から教はらず他人にも教へない心をもつた人も珍らしい。さういふ君が自分でもよく知らない君の天才が俺をうつとり

させる。君の心のこの部分が、その他の部分とうまく調和しなくなつてゐる時、特に君は美しい。決して武装したことのない君の心は、どんな細かな理論の網目も平気でくゞりぬける程柔軟だが、又どんな思ひ掛けない冗談にも傷つかない程堅い。」と評される。

一文の論の運びからみて、この箇所においてこのような人物像をあえて登場させねばならない必然性はあまり感じられない。虚構の必要度が希薄なのであり、これはやはり実在の特定人物が念頭にあって記されたものと見なすのが自然であろう。小林の交友関係においてこの人物像に最も合致しそうなのは、中原中也である。「突然だが俺はあの女とは別れた。」という長谷川泰子と目されるあの女とのことが、一篇中で大きな比重をもって語られていること、そして「俺は別に君を尊敬してはゐない、君が好きだといふだけで俺にはもう充分に複雑である。言はばそれは俺自身に対する苦痛だが、又快い戦なのだ。」との微妙な発言等を勘案するとき、ますますその感が深くなる。

しかしながら、かといって「X」が中也であると決めつけてしまうことはできないし、そうすることはかえって一文の主旨を損なうであろう。頭初、ほとんど無味無色な象徴的ともいうべき存在として語りかけられていたはずの「君」が、この期に及んで、いかにも中也を髣髴させるような具体相を帯びてきたこと自体がむしろ問題なのである。唐突の感が否めないのであり、あくまでも不特定多数ではないがしかし実在の固有名では呼べない「X」への私信という一篇の発想の一貫性を乱してしまっている。おそらく、「あの女」への言及がそれを引き出してしまったのではないかと推察されるが、一篇の構成からすれば、破綻とまでは行かないにしてもやはり統合性を失していると言うべきであろう。

従来『Xへの手紙』は、半ば小説風、半ばエッセイ風の作品と評されてきた。小説風と目される理由の第一は、

私信という形式を採って一篇が構成されている点にあると思われる。が、それを、小説仕立にするための一意匠と解するのは当を得ないであろう。作者はここで小説を、まして小説まがいのエッセイを書こうなどとしてはいない。「ありのまゝな自分を告白するといふ一事」に努めていることを疑ういわれは何もないのであって、この基本姿勢が、必然的に私信という形式を要求したのに違いない。小林は言う。

ありのまゝな自分、俺はもうこの奇怪な言葉を疑ってはゐない。人は告白する相手が見附からない時だけ、この言葉について思ひ患ふ。困難は聞いてくれる友を見附ける事だ。だがこの実際上の困難が、悪夢とみえる程大きいのだ。

「X」とは、この「告白」を聞いてくれる友に他ならない。もとよりそれは作者が、悪夢とみえるほど大きな実際上の困難を解決したことを意味しているわけのものではない。依然として悪夢は続いており、「X」はついにXなのである。「X」はむしろ、いかに実現が困難であろうとも、聞いてくれる一人の友を得ようとする作者の願望、もしくは覚悟の表白と言うべきかもしれない。そうしたXを想定することなしに己れの「告白」はなり立たないし、そうした場における「告白」というあり方にこそ、自己の言語活動の根源を見定め、据え直そうとする覚悟である。

同時にそれは「この世の真実を陥穽を構へて捕へようとする」行き方を超えようとするものであり、「批評家失格」に堕しているのではなく、ひるがえって真の言語表現の可能性を模索する営みであったと考えられるのである。「後悔するのがいつも遅い男、いづれ人間は自分の思つてゐる程早く変るものではあるまい。」という語調に、単なる自己韜晦ないし居直りを看取すると間違うであろう。『批評家失格』の結びで、にがにがしくも遅すぎた後悔

を味わっているのは確かだし、それをうけてのこの冒頭の一節が反語的に一種の自己変容――作者の言葉で言えば「成熟」――を示唆していることは見やすい。成熟というも、いわばこのしたたかな後悔の所産なのではあるまいか。

それにしても、告白とは本来、神ないし超越的なるものに向かってなされるべきものであろう。ところが小林はここで、後に詳しく触れるごとく、超越的なるもののささやきを聞くまでに至っていながら、ついにその声をやりすごす。そしてあくまでも、生身の人間に語りかけようとするのである。ある意味で、神に向かって語りかけることの方が、たやすいのかもしれない。それぞれに己れの日々の現実生活に追われて精一杯の人間に向かって勝手に語りかけ、しかも告白として真正面から聞きとどけてもらうことの難しさは、確かに想像に余りある。小林はその至難な行為にあえて一歩を踏み出そうとしたのであり、そのこと自体が実は一篇のねらいに他ならないであろう。つまり「Xへの手紙」という表題は、方法論などではなく、主題そのものなのである。

従って「X」はこの主題を成立させる必要不可欠な構成要素として抽象的に設定されたはずであったが、やがて微妙な変調をきたして来るのは、一文をしめくくろうとするにあたって、この主題の成否をその当のXに向かって問い正さずにはいられなくなったからであると考えられる。その際にいかにも中也めいたX像が現われてくるのは、「あの女」にまつわる宿命的な因縁はもちろんであるが（この問題について小林はのちに『中原中也の思ひ出』で多少言及している）同時に、ものを書くという行為の究極的な意味をやはり自身の体験にてらして解ってもらえるであろう人物とみたからではなかったか。「虚栄のうちで書く」云々との問答を回想した後で、「俺」は次のように続ける。

君とこんな会話をかはした事がある、何時の事だったかもう忘れて了った、どっちがどっちの言葉を言った

のかももう忘れて了つた。だが君も俺も自分で言つた言葉のほんたうの意味をその頃はまだ知らなかつた。今も俺達は同じ会話をとりかはす事は出来る、併し俺達はもう昔の様な表情はしまい。人はたゞ人に読まれるといふ口実の為に命をかけねばならぬ。そしてそれは楽しい事でもなければ悲しい事でもない。さうではないか、君はどう思ふ。

ここでも「俺」は自分の変化をはっきりと表明している。読まれるという口実の為に命をかけるとは、書くという言語行為にあたっての、これ以上に単純化は無理であろうと思われるほどに単純明解な、覚悟の披瀝である。しかもそれが「口実」とある点に注意すべきであろう。単に読まれる為に、ではなくその口実の為になのである。読む読まぬはしょせん相手の気のむき次第なのであって、強制することなどできはしない。いくら力んで書いたとて、読んでもらえる保証はまったくどこにもない。それでもなお読んで欲しいと願い、読まれると信じて、その自分のもうけた口実のために、との含みがここにはあると解される。

今、信じてと述べたが、『Xへの手紙』一篇においてこの信じるとの言葉は、きわめて重要な意味を有してしばしば登場するのである。それについては改めて取り上げるとして、とまれ、作者は「命をかけねばならぬ」との激烈なもの言いまでして、ここに己れの言語活動の足場を据えようとしたのであった。これとあの「陥穽を構へて」という発想との懸隔は明らかなのであって、こうした臍を固めつゝ書き・語る作者の眼前に、その私信の受け手たるXがいつまでも無味無色のままではなくやがて具体的な人物像となって立ち現われてきたのは、けだし当然かもしれない。そこにこそ、構成云々では律しられない一篇の主題に密着しての一文の魅力があると言えよう。

## 二

三十歳の「俺」は、今までに二度の自殺未遂を経験している人物である。「一度は退屈の為に、一度は女の為に」であったという。作者の生活歴にてらしてそれがいつ頃の出来事であったかを想定することは可能であるが、ここでそれをするのはいらぬ詮索でしかないであろう。「俺」自身が「俺はこの話を誰にも語った事はない、自殺失敗談くらゐ馬鹿々々しい話はないからだ、夢物語が馬鹿々々しい様に。力んでゐるのは当人だけだ。」「俺は（中略）それに自分のしでかした事件の顚末を克明に再現しようといふ、或る種の人々の持つてゐる奇妙な本能を持つてゐない。」としているからである。理由についても決して明確だったわけではない。女のためにと繰り返しながらもやがて「人は女の為にも金銭の為にも自殺する事は出来ない。繰返さざるを得ない名附けやうもない無意味な努力の累積から来る単調に堪へられないで死ぬのだ。」と考え直されるに至る。

自殺未遂の理由やいきさつはいかにもあれ、「俺」にとって問題なのは「兎も角も俺は生きのびた。」ということ、そして今「現に生きてゐる」ということなのである。しかも今は完全に自殺の問題から脱却し無縁になったかというと、そうでもない。「俺は今も猶絶望に襲はれた時、行手に自殺といふ言葉が現れるのを見る」のである。だが、彼は三たびその言葉に近づこうとはしない。というより出来ないのである。二度の未遂体験が彼をひきとめる。彼は「この（自殺という）言葉が既に気恥しい晴着を纏つてゐる事を確め、一種憂鬱な感動を覚える」ほかない。

二度の自殺未遂をへて、人並に三十歳をむかえて彼は「はじめて自分の凡庸がしみじみと腹に這入つた」「幾度見直しても影の薄れた自分の顔が、やつと見えだしたと思つた途端、こいつが宿命的にあんまりいゝ出来ではない

事を併せて見定めた。」という。いくぶんかの自嘲を含みながらも、これが作者の掛値なしの感概であることは疑いないであろう。そうした自分の顔を見定めねばならなかった作者に、三度目の自殺への誘惑は、もはや気恥しくも場違いのものと映った。かくて自殺への道を失した彼は、今なお時として、名附けようもない無意味な努力の累積の果ての絶望に襲われながら、しかしともかくも生きのびたとの地点に立ってあくまでも生の方向に己れを向け直そうとするのである。

余計者もこの世に断じて生きねばならぬ。

と、これはその地点に立った彼が己れに課したいわば至上命令であろう。例えば島崎藤村のように、自分のようなものでもどうにかして生きたいというのではない。「断じて」との強い口調に、一切の前提や条件付けを排して、生きるとの一事に自分を追いこんで行こうとする決意のほどがうかがえよう。そこで彼はこう断言する。

俺はこの世界の存在を或は価値を聊かも疑ってはゐない、といふのはこの世界を信じた方がいゝのか、疑った方がいゝのか、そんな場所に果しなく重ね上げられる人間認識上の論議になんの興味も湧かないからだ。

この世界は価値があるから生きよ、などというのではない。そもそも価値があるのか無いのかといった論議など、自分には問題にならないというのである。簡明に「聊かも疑ってゐない」とあるように、彼はここで認識論を超えていわば行動の原理に立っている。先ず、断じて生きねばならぬとの決意がある。この決意に立とうとする以上、

なおこの世界の価値を疑うことは自家撞着というよりもどだい意味をなさない。単なる子供っぽい不平不満に堕するに等しい。問題は明らかに、信じて行なうか否かのどちらかなのであり、中で彼は信じて生きる道を進もうとするのだが、ただしその場合に、疑わないことと、より積極的に信じることとの間にはわずかながらなお径庭がある。

俺の興味をひく点はたった一つだ。それはこの世界が果して人間の生活信条になるかならないかといふ点である。人間がこの世界を信ずる為に或は信じない為に、何をこの世界に附加してゐるかといふ点だけだ。この世界を信ずる為に或は信じない為に、どんな感情のシステムを必要としてゐるかといふ点だけだ。

「人間が」との普遍化したもの言いになっているが、それはつまり「俺」個人の問題でもあることはもちろんである。また「信ずる為に或は信じない為に」といいながら、彼自身が信じる方に賭けようとしていることは言うまでもない。すなわち彼はこの世界を疑ってはいない。ただ信じる為にのみ、この世界に何かを附加しようとし、これに伴なっての何らかの感情のシステムを必要としているということである。そして正にここにおいて、語るという言語行為が必須のものとして登場してくるのである。次にそれを端的に表白している言葉のいくつかを引用してみよう。本文に出てくるのと順序はまったく逆になるが、このように並べかえてみると真意が一層明瞭になると思われる。

俺が生きる為に必要なものはもう俺自身ではない、欲しいものはただ俺が俺自身を見失はない様に俺に話しかけてくれる人間と、俺の為に多少はきいてくれる人間だ。

俺とても黙ってゐた方がましなくらゐは承知してゐる。だが口を噤んだ自分のみすぼらしさに堪へる術を知らないとすれば――。（中略）語らうとする何物も持たぬ時でも、聞いてくれる友はなければならぬ。俺の理解した限り、人間といふものはさういふ具合の出来なのだ。

俺の様な人間にも語りたい一つの事と聞いて欲しい一人の友は入用なのだといふ事を信じたまへ。

今の俺は所謂余計者の言葉を確実に所有した。

生きねばならぬとの決意から、生きることの実践へ踏みこもうとするとき、必要とされるのが、語ること従ってそれを聞いてもらうことなのである。語ろうとする何物か、換言すれば語るに値する語るべき何らかの内容があるからそれを語ろうというのではない。語るべき何物もなく、黙っていた方がましだと解っていても、聞いてもらうこと従って語ることが必要だというのである。口を噤んだみすぼらしさに堪える術を知らないとは、生きては行けないとの謂いに他ならないであろう。繰返さざるを得ない名附けようもない無意味な努力の累積から来る単調に堪えられないで死ぬよりないということであろう。とすれば、「俺」にとって語ることが、唯一その無意味な努力から救いとってくれるもの、すなわち己れの生きる意味を附与してくれるものとなるのである。

かくて、彼にとり語ることは生きることと同義になる。自殺を二度しそこなったあげくに、己れの凡庸さと出来の悪さを悟り、合わせて「社会が俺といふ人間を少しも必要としな（い）」余計者と自己規定するに至った彼が、

「俺の様な人間にも語りたい一つの事と聞いて欲しい一人の友は入用なのだ」と言うとき、それが彼の生の意味に直結するぎりぎりの地点で表白されていることは疑う余地がない。だからこそ「X」に向かって「信じたまへ」と訴えるより他ないのであり、ひるがえってそれは、自分の語りかけを「X」が聞いてくれると信じるとの信条告白ともなっているのである。すなわち、この世界を信じるとは、聞いてくれる友たる「X」の存在を信じることであり、それを信じることに賭けて語りかけることが、彼にとっての生きるという意味に他ならない。その彼が「余計者の言葉を確実に所有した」というのは従って、生きるために必要なものをゆるぎなく手にしたとの宣言に違いないが、それは同時に、「X」に語りかける「言葉」という唯一の武器を手に、この世界を信じるという一筋の道に分け入ろうとする覚悟を披瀝した一節と読むことが可能であろう。

つまり、彼にとって言語行為とは信じるための行為であって、少なくともいわゆる自我の実現や自己表現のためのものではない。第一にその自我や自己なるものについて何よりも彼は懐疑的である。俺が生きる為に必要なものはもう俺自身ではないと言い切っていたのだし、また「もう充分に自分は壊れて了つてゐる」「近代人の自我は解体してゐるといふ事が、単なる比喩に過ぎないとしても、凡そ自我とは橋を支へるに足りる抵抗をもつた品物では恐らくあるまい。」とされる。ひるがえって、彼は次のような感慨を述べる。

かういふ処に俺は何かしらのつぴきならない運動を認める。女の仮面や嘘は女の独創であり、言はば女の勇気だとしても、逆に男の智慧にとつては、女の勇気は堪へられない程の虚飾に充ちてゐる。かういふ事情に就いて男も女も明瞭な意識を決して持つてはゐない、持ち得ない。それでゐて何故に二人の邂逅する場所にはいつものつぴきならない確定した運動があるのか。俺にはこの言はば人と人との感受性の出会ふ場所が最も奇妙

な場所に見える。たとへ俺にとつて、この世に尊敬すべき男や女は一人もゐないとしても、彼等の交渉するこの場所だけは、近附き難い威厳を備へてゐるものの様に見える。敢へて問題を男と女との関係だけに限るまい、友情とか肉親の間柄とか、凡そ心と心との間に見事な橋がかゝつてゐる時、重要なのはこの橋だけなのではないのだらうか。この橋をはづして人間の感情とは理智とはすべて架空な胸壁ではないのか。人がある好きな男とか女とかを実際上持つてゐない時、自分はどういふ人間かと考へるのは全く意味をなさない事ではないのか。

この感慨は、今は別れた「あの女」との深刻な交渉からもたらされたものである。その女との交渉は彼にとっての「成熟する場所だつた」という。「書物に傍点をほどこしてはこの世を理解してゐかうとした俺の小癪な夢を一挙に破つてくれた。」という。書物ならぬ生身の生きた一人の女との彼の恋愛が、いかに切羽つまった危機的な状態を呈したものであったか、説明の煩に堪えないとしつゝふと記された一節からもその片鱗は充分にうかがえる。「女を殺さうと考へたり、女の方では実際に俺を殺さうと試みたり」云々と。しかし彼は自己のその体験を決して特殊なものと見なそうとはしない。「何も彼も尋常な事をやつて来た。」というのである。ここに衒いや自己韜晦をみるのは当らないであろう。己れの凡庸さ加減が腹に入ったと同様の気味合いがここには横たわっているのであり、自己の一体験を絶対化してことさら意義深いものであったかのように振りかざすお目出たさに気付き、現実生活に密着しての否応なく相対化された視野を身につけること、それが彼の言う「成熟」でもあろう。

もとよりそれは己れの体験をないがしろにする、ということでは毛頭ない。人は誰でも自身の体験から逃れられないのであって、身にしみてそれがわかったときにこそかえって、すぐ隣りにまた別の生身の人間が同じように生きているという現実に気付かされずにおかない、とでも言おうか。成熟するとは、あくまでも自分の体験によりな

がら、同時に一般化というよりも普遍性をみる目をもってその自己体験を見返えすことが出来るようになることではなかろうか。少なくとも『Xへの手紙』において小林が用いているのは、そうした意味合いにおいてであると考えられる。

そうした多少は成熟したと自認する彼の目に、あの女との恋愛は、「俺は恋愛の裡にほんたうの意味の愛があるかどうかといふ様な事は知らない、だが少くともほんたうの意味の人と人との間の交渉はある。」との感慨を生んだのであった。そのほんとうの意味の人と人との間の交渉の内実が、先の引用文で語られているわけであるが、ここで注目すべきは、「のつぴきならない確定した運動」「近附き難い威厳」そして「心と心との間に見事な橋がかかってゐる」といった言葉である。

切実な体験からまっすぐに生みおとされた感慨を、男と女のみならず、人と人との真の交渉のありようと意味付けし直して、述懐するこれらの言葉には、明らかに深い感動と哀惜の情とが纏綿としているのである。彼がなぜあの女と別れたかについては一切触れられない。「要するに過ぎて了つた事だ、ふとさう思ふだけで俺は自分の過去を語る事がどうにも不可能なやうに思はれて来る。俺のして来た経験の語り難い部分だけが、今の俺の肉体の何処かで生きてゐる、さう思つただけで心は一杯になって了ふのだ。」という。その一杯になってしまった心のうちで、彼の肉体と共に生き続けてやがて結晶したのが、他ならないこれらの言葉であったろうと想像されるのである。

のっぴきならない運動といい、威厳といい、見事な橋という、あたかも目に見えるかのように語られるこれらの言葉は、『Xへの手紙』一篇の中で珠玉のごとく生気を放っている。あの女との経験を語ることが一篇の山場をなしており、従ってその体験から生まれたこれらの言葉に、一篇の核心がこめられているとみて間違いはないであろう。一篇においてやゝ性急な口調で次々に語られる、文学・言葉・歴史・政治・社会・個人・思想等々といった諸

般の問題はすべて、この核心とのかかわりにおいて言及されていると解されるのである。

そもそも一篇の主題たる「Xへの手紙」とは、実はこの橋をかけようとする営みに他ならないと言えるのではないだろうか。かつてあの女と自分とが邂逅し、二人の感受性が出会った場所に生起されたのっぴきならない確定した運動があった。その渦中にあっては、しかしそうした運動の真の意味に気附いてはいなかった。その場所が崩壊し、そして自分がもう充分に壊れて了っている今になって、そこにこそ稀有な真の意味での人と人との間の交渉のあったことがわかる。自分達が明瞭な意識を持ち得なかったその場所では、心と心との間に見事な橋がかかっており、奇妙にも近附き難い威厳を備えていたもののようにさえ見えてくる。

思うに、これらの言葉を語る彼の「経験の語り難い部分」では、そうした感慨が揺曳していたとみてよいだろう。彼はボードレールの科白として「今や私は自分の性格を空の四方にばら撒いた、これから取り集めるのに骨が折れる事だろう」を引用した後で、こう言う。「俺は今この骨の折れる仕事に取りかゝってゐる。」と。そして自分の過去に話題を転じてやがてあの女との恋愛に及ぶのであるが、こうした脈絡からしてそれらのいわば思い出話は、彼が壊れてしまった自分を取り集めようとする仕事の一環であったと解される。そしてその仕事を通して、彼は「凡そ心と心との間に見事な橋がかゝってゐる時、重要なのはこの橋だけなのではないのだらうか。」との思いに到達したのであった。

とすれば、壊れてしまった自分を取り集めるということは彼にとって、ついにかつてのあののっぴきならない確定した運動の生起した場所を再び構築し、そこに見事な橋をかけるという一事に帰着するのである。彼はそれを今や、語りかけるという言語行為によって実践しようとする。そのとき彼がこの世界を信じるとは、従って、言葉により、人と人との真の意味での交渉の証しである見事な橋がかかり得ることを信じる以外ではない。

こうしてみてくるならば、あの「人はたゞ人に読まれるといふ口実の為に命をかけねばならぬ。」との言葉が、少しも大仰な科白とは響かなくなる。彼にとって書く（語る）とは橋をかけることであるが、その橋の一方を持ってくれる読み手（聞き手）なしに、橋は成りたたない。そしてその見事な橋のかかる場所なしで、少なくともその成立を信じることなくして、彼がすっかり壊れてしまった自分を取り集める困難な仕事を遂行することは不可能だからである。

## 三

では、言葉により、心と心との間に見事な橋をかけることはいかにして可能なのか。出来るか出来ないかではなく、彼は命をかけてそれを達成しなければならないのであるが、そこでは言葉はどのような姿を見せるのであろうか。

俺はよく考へる。俺達はめいめいの生ま生ましい経験の頂に奇怪に不器用な言葉を持ってゐるものではないだらうか、と。たゞさういふ言葉は当然交換価値に乏しいから手もなく置き忘れられてゐるに過ぎない。若しさういふ言葉を取り集めてはつきり眺め入る事が出来るとすれば、俺達は皆言葉といふものが人間の表現のうちで一番高級なものだと合点する様になるのではないだらうか。とまれ小説を書かうと思つて書かれた小説や、詩を書かうと思って書かれた詩の氾濫に一切の興味を失って了った今、俺は他人のさういふ言葉が、俺の心に衝突してくれる極めて稀れな機会だけを望んでゐると言っていゝ。

彼が待ち望んでいるという機会は、とりも直さず自分の言葉が他人の心に同様に衝突してくれるように、そのような言葉を自分は語りたいとの望みに他ならないであろう。ところで、そうした生ま生ましい経験の頂の奇怪に不器用な言葉というものを、彼はやはりあの女との恋愛において体得したのであった。すなわち、

> 惚れた同士の認識が、傍人の窺ひ知れない様々な可能性をもつてゐるといふ事は、彼等が夢みてゐる証拠とはならない。世間との交通を遮断したこの極めて複雑な国で、俺達は寧ろ覚め切つてゐる、傍人には酔つてゐると見える程覚め切つてゐるものだ。この時くらゐ人は他人を間近かで仔細に眺める時はない。あらゆる秩序は消える、従つて無用な思案は消える、現実的な歓びや苦痛や退屈がこれに取つて代る。一切の抽象は許されない、従つて明瞭な言葉などの棲息する余地はない、この時くらゐ人間の言葉がいよいよ曖昧となつていよいよ生き生きとして来る時はない、心から心に直ちに通じて道草を食はない時はない。

と、これが先に触れた、「ほんたうの意味の人と人との間の交渉」の内実でもある。そこでは、言葉の二つの基本的性格ともいうべき「秩序」と「抽象」は一切しりぞけられる。すなわち言葉そのものの存立が否定されていると言ってもよいのであるが、にもかかわらず、この時ほど言葉が生き生きとして、心から心に直かに通じる時はないとされるのである。こうしたことは確かに体験を通してしか分らないのであり、一見逆説とみなされかねないここに、小林の言語観の基盤が根ざしていると言えよう。一言でいえばそれは、真に生きた言葉の問題であるが、こののっぴきならない運動の場所で体得された言語観を、ためらうことなくまっすぐに思想の言葉・文学の言葉の問題へと展開させて行ったところに、彼の文学論は確立されたのであった。加えて、この「生き生きとして」「心から

心に直ちに通じて道草を食はない」生きた言葉の生気が、彼に見事な橋の可能性を信じさせずにはおかないものとなったともみられる。

先ず思想の問題である。

ニイチェだけに限らない、俺はすべての強力な思想家の表現のうちに、屢々、人の思索はもうこれ以上登る事が出来まいと思はれる様な頂をみつける。この頂を持つてゐない思想家は俺には読むに堪へない。頂まで登りつめた言葉は、そこで殆ど意味を失ふかと思はれる程慄へてゐる。絶望の表現ではないが絶望的に緊迫してゐる。無意味ではないが絶えず動揺して意味を固定し難い。俺はかういふ極限をさまよふていの言葉に出会ふごとに、譬へやうのない感動を受けるのだが、俺にはこの感動の内容を説明する事が出来ない。だがこの感動が俺の勝手な夢だとは又どうしても思へない。

正確を目指して遂に言語表現の危機に面接するとは、あらゆる執拗な理論家の歩む道ではないのか。（中略）卓抜な思想程消え易い、この不幸な逆説は真実である。消え易い部分だけが、思想が幾度となく生れ変る所以を秘めてゐる。俺は屢々思想の精髄といふものを考へざるを得ない。（中略）

くどい様だが許し給へ、俺の言ふ事は何も格別な事柄ではない。その限り俺の言ふ事を文字通り信じ給へ。この世に思想といふものはない。人々がこれに食ひ入る度合だけがあるのだ。だからこそ、言葉と結婚しなければこの世に出る事の出来ない思想といふものには、危機を孕んだその精髄といふものが存するのだ。

引用が長くなったが、その分だけ余計な説明はいらないであろう。ここで留意したいのは、むしろ次の二つの点

である。一つは、彼が危機を孕んだ思想の精髄をみせているていの言葉に出会ったときの感動を強調していること、そして二つは、自分の言うことを「文字通り信じ給へ」と訴えていることである。

彼はここでも、いわゆる思想の言葉について論議しようとしているのではない。自分が大きな感動を受けた言語体験を語りながら、その経験の中核をなす語り難い部分、すなわち生きて動いているところのものを、まるごと信じて欲しいと訴えているのである。信じてまるごと受けとるか、疑って拒絶するか、そのどちらかであって中間はない。いわばこのとき彼は、読み手に対してその信受するか否かの決断を迫っているのであるが、それはとりも直さず、己れをまるごと差し出して受け手にゆだねているということである。思想というものを一個の品物のように差し出しているのではない。自分自身を差し出しているのである。思想の精髄とは、言語行為の極点にまで至って、言葉とそれを語ろうとしている人間の顔とが、もはや判別し難くなっているところのものではないだろうか。従って読み手は、言葉だけを受けとるというわけにはもはや行かないのであり、これを聞くことは生身の人間とのっぴきならない交渉を持つことと同義となる。そのようなところで語られる言葉にしか彼は感動を覚えないし、そうした緊張をはらんだ言語表現をのみ常に問題にしようとしている。このことは、文学を語る次の一節にあっても同様である。

2＋2＝4 とは清潔な抽象である。これを抽象と形容するのも愚かしい程最も清潔な抽象である。この清潔な抽象の上に組立てられた建築であればこそ、科学といふものは、飽くまでも実証を目指す事が出来るのだし、又事実実証的なのである。この抽象世界に別離するあらゆる人間の思想は非実証的だ、すべて多少とも不潔な抽象の上に築かれた世界だからだ。だから人間世界では、どんなに正確な論理的表現も、厳密に言へば畢竟文

体の問題に過ぎない、修辞学の問題に過ぎないのだ。簡単な言葉で言へば、科学を除いてすべての人間の思想は文学に過ぎぬ。現実から立ち登る朦朧たる可能性の煙に咽せ返る様々な人の表情に過ぎない。世に謂ふ詩とか小説とか其他芸術といふ名を冠せられたすべての人間表現はこの様々な表情中の一表情である。俺がこの一表情に最も心をひかれるのは、この一種の表情を命とする人々は、己れの仕事がやくざな抽象を土台としてゐる事を知りながら、仕事の結果は反対に人間の現実的な体験を直接に暗示してゐるものでなければならぬと感じてゐる人々だからだ。この仕事に実際上携はってゐても、この苦痛をつぶさに語ってゐる人は極めて稀れだ。

こうして、彼の体得した生きた言葉は、思想の精髄をへて、「文体の問題」すなわち「表情」の問題に還元される。その場合の文体とは、この世に生きるあらゆる人間が、皆めいめいの現実的な生ま生ましい体験のただ中でみせる、さまざまな表情と同義なものとなる。とすれば、「科学を除いてすべての人間の思想は文学に過ぎぬ」というが、一見して大胆ともみえるこの断言の意味するところは、意外に深いのである。彼は、詩も小説も評論も思想書も哲学書も歴史書も、そこに何らの本質的な相違を認めようとはしない。純粋な抽象である数学に立脚した科学以外のあらゆる言語表現は、言葉という中途半端な抽象により築かれた文体の問題に帰着する。すなわち人間の表情の一つであることにおいて等しいのである。文体の差は、表情の差でしかない。「不潔な抽象」といい「文体の問題に過ぎない」と言う。こうしたもの言いには、清潔な抽象たる数学に比較しての否定的な意味合いがこめられているかのようである。だが、ひるがえって彼は、そこにこそ最も心をひかれるというのである。それが、非実証的というよりは実証不可能な、さくそうした現実的な体験をかかえて生きている人間の顔を直接暗示しているからに他ならないであろう。

では、その人間の表情たる文体とはどのようなものであるのか。次の一節はそれを考える手がかりを与えてくれる。

凡そ真の思想とは本能に酷似してゐる。これを感得する時は驚く程簡明だが、これを説明しようと思へば忽ち無暗な迷宮と変ずるものではあるまいかと。これを人間の仕事だと考へれば成る程われわれの手に余る不可能事だが、これが人間の一種の想ひだとしてみれば断じて架空事ではない。人の生命の或る現実的な面である。

この、真の思想とは人間の一種の想いだとの見解は重要である。いかに論理的正確さを目指した思想も、ついに文体の問題でしかない。だが、その文体は、あたかも表情がその顔の持ち主の言葉にならない一種の想いを現わしているごとく、人間の生命に密着した切実な一種の想いを表わしているのである。

もしそうであるならば、ものを書く（語る）ということはついに、この一種の想いを述べることに尽きるであろう。ところが人間の生命のある現実的な面であるその想いは、これを説明することは当人にとってもしょせん不可能なのである。従って、直かに感得してもらう以外にない。人の心と心にかかった見事な橋とは、この想いであり、生命に直接した人の想いを感得できる感受性によって結ばれた橋なのである。

一篇の終りに近く、悲し気な音楽が鳴り渡り、様々な言葉が煙草の煙と一諸に立ち登る溜り場で、彼は、耳もとで誰かがさゝやく声を聞く。

——何故お前はもつと遠い処に連れて行つて貰はないのか。お前の考へてゐる幸福だとか不幸だとか、悲劇だとか喜劇だとか、なんでもいゝ、お前がどんなにうまく考へ出した形象であろうとも、そんなものは本当の

この世の前では、―― さあなんと言つたらいゝか、いやお前は何故大海の水をコップで掬ふ様な真似をしてゐるのだ、―― 何故お前はもつと遠い処に連れて行つて貰はないのだ。

と。しかし彼はこのさゝやきに耳を傾むけ、応えようとはしない。やがてさゝやきが通過してしまうがままにしているのである。そして、「そして俺は単に落ち着いてゐるのである。／俺は今すべての物事に対して微笑してゐる。たゞ俺にもよく解らない深い仔細によつて、他人には決してさうは見えないのだ。」と言う。

一篇中で先にニーチェの思想に言及していたことからすると、このさゝやきの主は、ニーチェの言う「超人」とみなすのが妥当のようである。ただし、ニーチェに限定するのではなく、一層広い意味における超越的なるものの誘いと解することも、充分可能であろう。同時にこれはまた、彼の中に共存していたもう一人の彼の声でもある。

超越的なるものは彼に、もっと遠い処の存在を示唆する。なぜもっと遠い処に連れて行って貰わないのだと使嗾する。その遠い処とは、大海の水をコップで掬うような徒労でしかないこの世の営みを超えた宗教的彼岸とみられる。が、それをやりすごして彼は、次の一文をもって「Xへの手紙」をしめくくるのである。

ではさよなら。君が旅から帰る日に第一番に溜りで俺と面会しよう。俺は早くから行つて君を待つてゐる。だが俺が相変らず約束をうまく守れない男でゐる事を忘れてくれるな。俺は大概約束を破つて了ふ様な事になるだらうと心配してゐる。だけど君はどうしても来てくれなくてはいけない。俺は君の来てくれる事を信じてゐるのだから。

ではさよなら、――最後に一番君に言ひたい事、どうか身体を大事にしたまへ。

こうして超越的なるものからひるがえって、彼は「X」に語りかける一篇の流れに復帰する。自分は約束を破ってしまうだろうが、君はどうしても来てくれなくてはいけないよとの身勝手な要求をもって一篇を閉じようとする。だがこの言葉の真意はもはや明瞭であろう。自分が「X」を「信じている」という、信の一事にすべては尽きるのである。この一事のために『Xへの手紙』一篇はしたためられたと言ってもいい。ここに自分の言語行為の基盤があり、そこにしか自分の生きる意味はないと見定めた小林は、以後ひたすらこの道を歩き続けた。『Xへの手紙』は、その第一歩であった。かくて、見事な橋をかけたいという彼の生命の想いをこめた私信は発せられた。あとは、「X」が身体を大事にして無事旅から戻り、まっさきに自分に会いに来てくれるのを、落ちついて待っていればいい。

（五十八・十一・五）